

及をみつけられなかったし、また斎藤美穂（本学会会員）が婦人雑誌の優生関係記事を探索したところでも三宅によるものはみあたらなかった。

こうみると、日本の優生運動を指導し国民優生法制定にあずかったとされる三宅は、自分自身の理論、見識あるいは信念をもたないいわばかつがれた存在だった、と評価するべきだろう。

（二〇〇二年三月例会）

\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*

介  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*

見市雅俊・斎藤 修・脇村孝平・飯島 涉 編

### 『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』

歴史学の教育は主に政治経済史についてのものであり、その背後にある社会史、生活史については、必ずしも充分に行なわれてこなかったところがある。特に宗教が支配した時代や帝国主義に代表される軍事力が支配した時代を経て、科学が支配すると考えられた近代においてさえも、歴史を大きく変えてきたそれぞれの時代に生きる人間の生と死にかかわる問題の歴史的検証は必ずしも歴史学の中心的課題とはならなかった。

このたび見市雅俊氏を中心とする文学部、経済学部等に身を置く学究による、病気と医療の近代史にかかわる問題を論じた本書が発刊されたことの意味は大きい。近代アジアにおけるその歴史については、ヨーロッパ、アメリカ、アメリカ両大陸についての研究に比較して、その多様性と中国文化圏の存在の大きさのために、いまだ未開拓状態にあると編者は述べている。この地域において、日本という後発の帝国主義国家が急速に発展した歴史のなかで政治、軍事と不可分の関係にあった衛生行政についての再検証は避けて通れない問題である。特に第二次世界大戦後に可能となった、DDTやワクチン・化学療法剤による物量作戦的保健医療の開始以前における衛生行政の重要性はきわめて大きかったと考えられる。

本書の第一部では四編者による研究史の概観がされており、この領域についての問題提起と現在までの整理がされている。第一章の見市雅俊氏による「病気と医療の世界史」では開発原病の概念とそれに対処した帝国医療の方法が述べられている。そしてアメリカにおける鉤虫症対策を中心としたロックフェラー財団の関与が詳細に解説されている。本書では触れられていないが、日本の国立公衆衛生院創設に関わる援助の文脈が読み取れる。第二章は斎藤修氏による「開発と疾病」であり工業化社会に先立つ農業の集約化から発生する疾病構造の変化と、その後の工業化社会での病気の歴史における経済決定論が紹介されており興味深い。

第三章は飯島涉、脇村孝平両氏による「近代アジアにお

る帝国主義と医療・公衆衛生」である。A・W・クロスビーによりコロンプスの交換と呼ばれた新大陸発見後の、交通・帝国主義・病気のグローバリゼーションから論を始めて帝国主義的植民政策の時代における衛生行政の介入について述べている。戦後の日本の移民政策が棄民とさえよばれる失敗であつたことを考えながら読みすすんだ。

第二部には八事例と比較として次の七編の論文が収載されている。第四章『衛生』という秩序(阿部安成、第五章)前近代日本の死亡の季節変動(鬼頭宏、第六章)『乳児死亡問題の比較社会史』(川越修、第七章)『アノフェレス・ファクターとヒューマン・ファクター』(脇村孝平(植民地統治下のマリア防遏・インドと台湾)、第八章)『近代日本の熱帯医学と開拓医学』(飯島渉、第九章)『台湾における植民地医学の形成とその特質』(劉士永、第十章)『細菌兵器と村落社会』(上田信。紙数の関係で各論文を紹介できないのが残念である。ともすると歴史学からも医学からも忘れ去られるか、又は逆に評価を避けられてきた問題が、学術の対象として取り上げられており、それぞれに付記されている文献とともに研究の指針を示している。

特に上田信氏による第十章は中国浙江省義烏市崇山村における日本軍によるペスト菌を細菌兵器とした実験と考えられる事例についての研究である。帝国主義の時代の軍隊が行った研究に世界中で多くの医学者を含む科学者が携わった。その後の冷戦時代の二大国による管理の時代を経て冷戦後の混

乱する現在にまでその科学知識と技術は継承されてきた。二〇〇一年九月十一日のアメリカに対するテロリズムの襲撃とその後の炭疽菌郵便の事件にアメリカだけでなく世界中が震撼している。

優位な戦力を持つものの武器であつた細菌兵器が貧者の武器、見えない軍隊の兵器として現実になつてしまった。対人的な細菌兵器として使われている炭疽菌は人畜共通感染症の起因菌である。世界中にばら撒かれてその病原性をあらわしてきた時に地球の生態系に長期間にわたる重大な問題をきたす可能性が否定できない。六〇年前のペスト菌兵器の実験が中国の一寒村に現在まで残している問題を読みながらそのことを強く考えさせられる。

歴史の教育の中で医学史を含めて科学史がもっと多くなされることを望むものである。本書が医学史に興味を持つものに限らず広く医療・保健・教育にかかわる人に広く読まれることを期待する。

(渡部 幹夫)

〔東京大学出版会、文京区本郷七―三―一、電話〇三―三三八  
一―一八八一四、平成十三年八月二十七日、A五判 三二四  
頁、四八〇〇円〕